



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	紀海音浄瑠璃の古典和歌利用について(1) : 『伊勢物語』と『百人一首』
Author(s)	富田, 康之
Citation	国語国文研究, 103, 28-36
Issue Date	1996-05-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94840
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_103_28-36.pdf



紀海音浄瑠璃の古典和歌利用について(1)

——『伊勢物語』と『百人一首』——

富 田 康 之

はじめに

元来、語りとしての浄瑠璃は、五字・七字の文句のリズムに和歌を取り入れることが好都合であった。紀海音の浄瑠璃作品にも、他の浄瑠璃作者と同様に古典和歌を利用した詞章が多く見られる。或る場合は、引用として和歌そのままの表現が用いられ、或る場合は、和歌の一部を地の文の中に融合する熟れた表現をとる。しかし、海音の和歌利用の方法は、単に表現の利用に止まるのか、または、作劇における構想にまで及ぶのかといった問題等については、まだ十分に解明されている訳ではない。そこでその為の基礎的調査が必要となる。

今回は、当時の観客に最も知られた古典作品の中から、『伊勢物語』と『百人一首』を取り上げ、海音の時代物浄瑠璃（世話物に關しては後日調査する予定）に於ける利用の実態を指摘する。その場合、

古典和歌を利用したと認定する基準は、原則として二句以上に連続する語句的関連が確認できるものとする。連続しない場合や、和歌の一般的類型表現と考えられるもの等の様に、特定の和歌の明確な利用と確認出来ない場合は、適宜【参考】として示した。また、表記については、『伊勢物語』の場合、最初に『伊勢物語』の段数を示し、続いて和歌を記す。◆印以下は『紀海音全集』を基に、海音作品の和歌利用部分を指摘し、続いて括弧内に作品名・段数・収録巻・頁数・行数の順に表わす。『百人一首』の場合は、最初に和歌番号を示し、以下は『伊勢物語』の場合と同様である。

『伊勢物語』

一 かすが野の若紫のすり衣しのぶのみだれ限り知られず
◆あすか川。かはる淵瀬のきのふけふ。過つる宇治のかへるさより。
藤壺の御方は若紫のすり衣。忍ぶ思ひの乱れてはかりこめられし籠

の内。

『花山院都異』第二・第三卷二四二頁八行

二 起きもせず寝もせて夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつ
◆姫君聞召きやいのわるいこともなふ。只うかくとおきもせずね
もせてやるをあかしては。はるの物とや恋ならん。只世の中があぢ
きのふ思はぬ涙がこぼるゝ也。

『鬼鹿毛無佐志鑑』第一・第一卷一一四頁六行

三 思ひあらば律の宿に寝もしなんひじきものには袖をしつゝも
◆家もよしなしやゑむぐらしげれる宿に妹とねて。ひしき物には袖
をして。ともしらがまでそふてこそ。世にすむかひはありなまし。

『花山院都異』第三・第三卷二五七頁六行

五 人知れぬわが通ひ路の關守はよひくごとにもうちも寝なん
◆たゞなに事も片思ひあまが見。すてゝせでくらすな。其かよひぢ
の。せきもりは。よいくごとにもうちもねるいもせの中のなかく
に。二せをへだつるこひのせき。

『仏法舍利都』第四・第二卷三五三頁一一行

【参考】親はらからのかたい氣に世になき事とうとまれて。よいく
事の關守の目をぬすんだもつらかりし

『鎌倉尼將軍』第二・第一卷二〇九頁九行

六 白玉かなにぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを

◆いたわしや少將は。小町御前をおひ參らせいづくときして白玉か。
何ぞと人のとはんには。露ときへなんきへなばきへよ。ふたりが中。

『小野小町都年玉』第三・第二卷三四頁六行

◆コリや女共こちらむけ。ハテ何んぞいの。何ぞと人のといし時かゝ
とこたへてだいてねよ。げに夏の日のならいとべんくだらりと

ながい日は。

『忠臣青砥刀』上・第七卷二〇二頁八行

九 から衣きつゝなれにしつましあればはるくきぬる旅をしぞ思
◆かずよみていつゝわたせるはしいたの。はるくきぬるたびはう
いもの。おもしろいもの。

『鎌倉尼將軍』第四・第一卷二三三頁一一行

一〇 みよし野のたのむの雁もひたぶるに

君が方にぞよると鳴くなる

◆みよし野のたのむのかりもひたぶるに。君がかたにぞよるとなく
よめりのばんはいつかたも。

『仏法舍利都』第一・第二卷三一八頁五行

一二 武藏野はけふはな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり
◆はつもとゆひもわか草の。妻やこもりていつしかに。いたづらに
ふく。あすか風。

『三輪丹前能』第四・第五卷三三三頁四行

一三 武藏鎧さすがにかけて頼むには

とはぬもつらしとふもうるさし

【参考】中に立たる介のぶはむさしあぶみの心地して。いはぬもつら
しいへばまたはゝのなげきをしのお草。

『曾我姿富士』第四・第二卷一〇五頁六行

◆人間にあらざれば。名乗もつらしなのらぬもむさしあぶみやむさ
し野に。幾年ふりし老づるの

『八幡太郎東初梅』第四・第六卷六一頁六行

【参考】物にくるふはたれゆへと。とはぬもつらし。とふもうしいつ
迄かくはながらへて。『仏法舍利都』第四・第二卷三五〇頁三行
一四 夜も明けばきつにはめでたくたかけの

まだきに鳴きてせなをやりつる

◆エ、つれなの鳥や情なや。きつにはめなてくだかけの。それさへ心有物を月日へたてゝ只一夜。

(『本朝五翠殿』第三・第四卷三三頁六行)

一九 天雲のよそにも人のなりゆくかさすがに目には見ゆる物から
◆古歌の心に似たるぞや雨雲の。余所にも人の成行か。さすがにめには見ゆる物から。かやうに読しは業平を恋つゝ人の仇のすさみ。

(『新板兵庫の築島』第三・第四卷九八頁一一行)

二三 風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらん

◆爰にすてをく置みやげ跡はしら浪たつた山。よはにぞ君がお供して都を。さしてぞ帰りけり。

(『小野小町都年玉』第一・第二卷一四頁一二行)

五〇 鳥の子を十づゝ十は重ぬとも思はぬ人をおもふものかは

◆あはびの貝のかた思ひ。十づゝ十をかさねたる。鳥の子地はおあしも百。

(『坂上田村麿』第三・第六卷三三〇頁七行)

六〇 五月まつ花たちばなの香をかげばむかしの人の袖の香ぞする
◆道の辺の。櫛の本に立やすらひ。さつき待。花橘の香をかげは。

昔の人と。詠しに我は。梢の秋待て。命をつなぐ。外なしと。

(『富仁親王嵯峨錦』第四・第六卷一八九頁九行)

六三 百年に一年たらぬつくも髪我を戀ふらし面影に見ゆ

◆顕基驚立のきて。百とせにひとゝせたらぬつくもがみ。我を恋とはいまはしや詠ぜし詞は。其昔。藤原の興範が水やは有とこひしとき。たはふれかけし口ずさみ。

(『日本傾城始』第四・第五卷二七二頁五行)

六五 戀せじと御手洗河にせしめそ神はうけずもなりにけるかな

◆かのなり平の中將は。戀せじとみたらし川にせし御祓。神はうけずもと詠給ふ。やんごとなき雲の上人さへ。まゝならぬは此道じや物。

六五 海人の刈る藻にすむ蟲の我からと

(『曾我姿富士』第一・第二卷六五頁八行)

◆何とめいどへ帰るとは扱は此世をさりしよなもにすむむしのわれからと。やいばのうへにきへし身の此世に心はとゞめねど。

(『鎌倉三代記』第四・第四卷二二七頁八行)

六八 鴈なきて菊の花さく秋はあれど春の海邊にすみよしの濱

◆程なく敵に勝時の。声帆に上て。帰る鴈春の海邊に住吉の。浦にしあらば世の中の。

八二 散ればこそいとゞ櫻はめでたけれ

(『本朝五翠殿』第四・第四卷五六頁二行)

◆愚の詞侍らふや。されば古歌にもちればこそ。いとゞ桜はめでたけれ。浮世に何か久しかるへきときく物を。

一〇三 寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめば

(『義経新高館』第四・第四卷三二八頁八行)

いやはかなにもなりまざる哉

◆見きたる其夢かへせ夢かへせ。夢をはかなみまどろめはいやはかなにもなりまざる。扱情なのうきねやとわつとさけぶぞ。道理成。

(『本朝五翠殿』第三・第四卷三四頁五行)

一〇四 世をうみのあまとし人を見るからに

めくはせよとも頼まるゝ哉

【参考】其うへきけば其人も。いかなることか世を海の尼衣きて国々を。まはり給ふとさたすれば

一〇六 ちはやぶる神世もきかず龍田河
（鎌倉尼將軍 第四・第一卷三二九頁九行）

からくれなゐに水くゝるとは

◆在原の業平はさせる才智はなけれども。和歌の達人千早ふ。神代もきかぬ立田川。からくれなゐに水くゝる。おもかげ空にむかふとは。

（『新百人一首』第五・第三卷一二四頁七行）

◆翁さび人なとがめそ狩衣けふばかりとぞ鶴も鳴くなる
◆あしもとも。よろりくゝとおきなさび人なとがめそ我君の。仰はつるの一こゑをうけ給はりて老の浪

（『曾我姿富士』第三・第二卷一〇三頁四行）

一一九 形見こそ今はあだなれこれなくは

忘るゝ時もあらましのを

◆今宵我。手にふれるのも主従の。形見こそ今は仇なれはなくは。忘るゝ隙も有なんと。読しも理りや猶思ひこそはふかけれ。

（『日本傾城始』第三・第五卷二五二頁一二行）

『百人一首』

一秋の田のかりほの庵のとまをあらみわがころもでは露にぬれつゝ
◆天智天皇秋の田の。かりほのいほの。とまをあらみ。我が衣手は。露にぬれつゝ。此すべらきの其昔中の大兄と申せし時。

（『新百人一首』第五・第三卷一二三頁八行）

二 春すぎて夏来にけらし白妙のころもほすてふあまのかぐ山
◆やよひも過て思ふ事なつきにけらし白たへの。衣たちぬい色くの袖をゐかうにかけまくも。忝けなしや大君の。

◆ぞとう天皇春過て。なつきにけらし。白妙の。衣ほすてふ天のかぐ山。此御歌はまん葉と。心言葉のかはりしは。
（『仏法舍利都』第一・第二卷三一五頁三行）

三 足引の山鳥の尾のしだりおのがくし夜をひとりかもねん
◆柿の本の人丸は。ことのはぐさのむすぶの神。その名もよしやあしびきの。山鳥の尾のしだり尾の。ながくいふも語るのも。且はおそれの有がたき。

（『新百人一首』第五・第三卷一二四頁三行）
五 おくやまに紅葉踏分なく鹿の声きくときぞあきは悲しき
◆是がこちとが物ずきと手に手を引てをく山の。紅葉ふみわけじやらくらとたはふれ遊ぶそおもしろや。

（『信田森女占』第一・第一卷三〇六頁九行）

◆ヲ、おもしろく。もみぢふみ分鳴鹿の胸骨かたばねむしがしら。葉喰にはてうぐと大手をひろげて追廻す
（『富仁親王嵯峨錦』第一・第六卷一五二頁八行）

【参考】さか様なりし手むけ山。もみぢふみわけさほしかの。かゑろとなけど。帰らぬはしでの山ぢに。まよひ子の。

（『三輪丹前能』第四・第五卷三二五頁一〇行）
六 かさゝぎのわたせる橋にをくしもの
しろきをみれば夜ぞふけにける

◆又家持が多い歌には。たうふぐしわたせる。橋におく霜の。白き

を見ればやしよくなりけり。

〔『新百人一首』第二・第三卷八九頁一行〕

◆されば和歌にも。かさゝぎの。わたせるはしに。おくしものしろきを見ればよの。よこそねられねとよむことのはのこよひしも。

〔『殺生石』第一・第四卷二二九頁二行〕

【参考】情うす茶の中立は。雪の口切かい取に。しやならくと飛石の。白きをみれば。よぞふけて。やがておぼゝの茶のみ時。

〔『殺生石』第二・第四卷一五七頁一三行〕

七 天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも

◆みどりの袖をひる返し天のはらふりさけ見れば。かすみ立あまぢまどひて。ゆうくと

〔『大友皇子玉座靴』第四・第六卷三二八頁一三行〕

八 我庵は都のたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふ也

【参考】ゆづりもなし給はず。世を宇治山の山守と。御身を返り見逆心を思ひ切給へやと。

〔『神功皇后三韓責』第二・第五卷二六頁一二行〕

九 花のいろはうつりにけりないたづらに

我身よにふるながめせしに

◆筆取上てかく計花の色は。うつりにけりないたづらに。我身世にふる。ながめせしに。つらね給ひてこしもの千草に是をとの給へば。

〔『小野小町都年玉』第一・第二卷八頁一一行〕

◆道のしほりの。はなの色は。うつりにけりないたづらに。我が身世にふるながめとは。見るよりおもき言葉也。

〔『新百人一首』第五・第三卷一二四頁四行〕

一〇 これやこの行も帰るも別れてはしるもしらぬも相坂の関
◆其蟬丸のゑい歌には行も。帰るも別れては。しるもしらぬも。逢坂の。関に無常をよせし也。

〔『新百人一首』第五・第三卷一二四頁九行〕

一一 わたのはら八十嶋かけて漕出ぬと

人にはつげよあまのつりぶね

◆かいとりのべて。和田の原。八十嶋かけてこぎ出る。あまのつり船恋のふねゆられゆらるゝ浪のうゑ。

〔『鎮西八郎唐土松』第四・第五卷二〇一頁二行〕

一三 つくばねの峰より落るみな川こひぞつりて淵となりぬる

◆ふりさけ見ればつくばねの。みねより落るみな川。いまだ春にはあらねどもなみに花さくさくら川

〔『義経新高館』第三・第四卷三二四頁六行〕

◆片手にちよつとつく羽ねに。恋ぞつりてあないちの。中目にゆけばおいてうと

〔『八幡太郎東初梅』第三・第六卷三四頁五行〕

一六 立別れいなばの山の嶺におふるまつとしきかば今かへりこむ
◆このもとに捨ていなばの峰におふ。またばこんくこんくと泣て別れて

〔『信田森女占』第四・第一卷三三三頁五行〕

◆竹は己とおき直り松はねほれて立別れ。いなばの山のみねにをゝ。またはこんく袖の雪〔末廣十二段〕第三・第三卷一五三頁六行

◆旅行人の立わかれ。いなばの山や。みやち山みねの。もみぢのいろくは。

〔『義経新高館』第三・第四卷三二三頁九行〕

一七 ちはやぶる神代もきかず龍田川からくれなゐに水くるとは
◆前出。『伊勢物語』一〇六段参照。

一九 難波がたみじかきあしのふしのまも

あはで此よを過してよとや

◆行ば程なく。なにはがた。みぢかきあしの津の国や。大江のきしにつなぐ舟
【三輪丹前能】第四・第五卷三二五頁七行
◆どふぞかゝめてもらいたい。みじかきあしのふしのまも。あはで此よがこたへぬと。取ひろふてぞいひちらす。

【坂上田村麿】第三・第六卷二三八頁四行

二六 をぐら山峰の紅葉は心あらば今ひとたびのみゆきまたなん
◆あじやりのおはす小倉山。みねの紅葉は心あらば今一度のあふ事を。せめてたのみにさりとともと。

【新百人一首】第二・第三卷八三頁二行

二七 みかのはらわきてながるゝ泉河

いつ見きてとかこひしかるらむ

◆いついつみぢや。いづみ川。わきてながるゝ和泉の国大和大路にさしかゝり。

【仏法舎利都】第四・第二卷三四八頁七行

二九 心あてにおらばやおらむ初霜のをきまどはせるしらぎくの花

【参考】五百らかんにきせ綿を。おきまどはせるしら露の色と姿は明鏡に。
【新百人一首】第一・第三卷六八頁四行

【参考】けふふみそめて初霜の。おきまどひ行たび姿てゐるひの姫は力弥太が。
【本朝五翠殿】第四・第四卷四六頁七行

三一 朝朗有明の月と見るまでに芳野の里にふれるしら雪

【参考】草津の宿の朝ぼらけ。有明しづむ水海の。まん／＼としてはてしなく。
【新百人一首】第二・第三卷八三頁八行

三五 人はいさこころもしらず故郷ははなぞむかしのかに匂ひける

◆筆にのこせし。貫之が。人はいざ心もしらず古里を。花ぞむかしのかににほふ。名もかうばしき御所所。

【新百人一首】第五・第三卷二二四頁六行

三七 白露に風のふきしく秋のゝはつらぬきとめぬ玉ぞちりける

【参考】ことはりしらぬ涙のみびぎに。ちり行白玉を。つらぬきとめぬ。あをやぎは。思ひくゆらず袖がうる。

【義経新高館】第四・第四卷三三八頁一〇行

【参考】雪姫はつくぐと間に思ひのむすばれし。糸くり出す涙の露つらぬきとめぬ顔を上。

【富仁親王嵯峨錦】第二・第六卷一六二頁一行

四一 恋すてふ我名はまだき立にけり人しれずこそ思ひ初しか

◆姿やさしやめにちら／＼と見るめうらめし。恋すてふ。わがなはまたき立にけり人しれずこそ。思ひそめにしそめばをり。

【鬼鹿毛無佐志鑑】第二・第一卷二二〇頁五行

◆はあゑい／＼恋すてふ我名はまだき立にけり。人しら浪としのびつゝせど浦なみにたつなみの。

【殺生石】第一・第四卷一三二頁一行

◆人こそしらぬみちのくのしのぶがことを恋すてふ。我名はまだき立にけり。どふぞかゝめてもらいたい。

【坂上田村麿】第三・第六卷二三八頁四行

四二 契きなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山なみこさじとは

【参考】越前へいてそう迄と。末の松山浪ならでこすの奥にぞ入給ふ。
【本朝五翠殿】第三・第四卷三三頁五行

四六 由良のとを渡る舟人かちをたえ行衛もしらぬ恋のみかな

◆色と情の二瀬川。戸わたる船のかちをたへ。ふらつく酔の品さだめ
（『花山院都巽』第一・第三卷二二六頁一〇行）

【参考】おのづから内外の者も主の氣に。かぢをたへたる心地するゆらのみなどのあるじなる。

（『山栴太夫恋慕湊』第四・第二卷二八四頁一行）

四七 やへ葎しげれる宿のさびしきに人こそ見えねあきは来にけり
◆はなちはやらじどこ迄も。付まどはるゝ八重葎繁。れる宿とあるゝ共。君と我とがしげり合心のやどりはくちせぬ岩ほ。

（『日本傾城始』第四・第五卷二七〇頁九行）

四八 風をいたみ岩うつ波のをのれのみ

くだけてものをおもふ比かな

【参考】姫君は暫しといへど余所に吹。磯山おろし浜風に岩打浪の我からと。心を碎甲斐もなく

（『新板兵庫の築島』第四・第四卷一一七頁一三行）

五〇 君がためおしからざりし命さへながくもがなとおもひぬる哉
◆源左もにつこと打笑おしからざりし命さへ。敵のくびを見る迄は永くもがなといはふ身の。いそげや源五。さらばでござるおやち様

（『鬼鹿毛無佐志鑑』第三・第一卷一三七頁一行）

◆姫君いきの下よりも。おしからざりし命さへ。ながくもがなと思ひしは夫婦の人の情をばむげになさじとのがれこし。

（『本朝五翠殿』第四・第四卷四九頁四行）

五一 かくとだにえやはいぶきのさしも草

さしもしらじなもゆる思ひを

◆いとをしのお心や。わが身の上をかくとだにゑやはいぶきのさし

も草。やいとのかずはもゆる共。煙の跡のかり姿。

（『花山院都巽』第三・第三卷二六〇頁三行）
六一 いにしへのならの都の八重桜けふ九重にほひぬるかな

◆あなたよりのおながれ。酒の銘は八重桜けふ九重に色も香も。それは風味といふ物は。すぐに甘露があれじやある。

（『花山院都巽』第二・第三卷二四三頁九行）

六二 よをこめて鳥の空音ははかる共よにあふさかの関はゆるさじ
◆うしや浮名は橘の梢にむれてあつまりて。鳥のそら音をはかりても思ふ中をば引わけて。（『本朝五翠殿』第三・第四卷三二頁八行）

【参考】世の中の。夢路を。つぐる関の戸は。鶏の空音も嵐吹。梢の紅葉こがれてし。
（『花山院都巽』第四・第三卷二六六頁二行）

六三 今はたゞおもひ絶なんとばかりを

人づてならでいふよしもがな

◆木ぐの料理がおくゆかしい。おもひたへなんとばかりを人づてならでいふたらば。よもやいなどとはいはぬはづ。

（『坂上田村麿』第三・第六卷二三八頁九行）

六五 恨みわびほさぬ袖だにある物を恋にくちなん名こそおしけれ
◆孝行も。忠義もともに埋れて爰にくちなん。名こそおしさに。是迄まみへ。候也（『神功皇后三韓責』第四・第五卷五六頁一〇行）

六七 春のよの夢ばかりなる手枕にかひなくたゝむ名こそ惜けれ
◆卯のはの前とてことし二八の春の花。夢計なる手枕に。まだ妻なしや。恋ざかり。（『小野小町都年玉』第一・第二卷一五頁一行）

七七 瀬をはやみ岩にせかるゝ滝川の

われてもすゑにあはむとぞおもふ

【参考】暫のわかれいきわかれ。恋ぞみなぎる滝五郎。われても末に大木の介。忠有義有濡も有。

（『三輪丹前能』第三・第五卷三二四頁一一行）

七八 淡路嶋かよふ千鳥のなく声に幾夜ね覚ぬすまの関守

【参考】扱又西にあはぢ島かよふ。ちどりも我々が。今のうき身をなくねかと。

（『新板兵庫の築島』第四・第四卷一一〇頁八行）
七九 秋風にたなびく雲のたえまより

もれいづる月のかげのさやけさ

【参考】あら恥かしのお尋や。大内山の霞よりもれ出る月の都人。

（『八幡太郎東初梅』第四・第六卷五八頁一〇行）

八七 村雨の露もまだひぬまきのはに霧たちのぼるあきのゆふぐれ

【参考】くるはずまはしぐれの雨よ。ふつつふらしつむらく雨の。まだひぬ。つゆもまだひぬやよや。

（『曾我姿富士』第四・第二卷一一〇頁九行）

八九 玉のをよ絶なば絶ねながらへば忍ぶことのよはりもぞする
◆蜘蛛にかゝる玉の緒もたへなばたへねいとはねど。草の陰成母上の。迷ひ給はん悲しやと。

（『愛護若婿箱』第三・第二卷一五四頁五行）

◆玉の緒よ。たへなばたへね。ながらへば。しのぶることのよわりもぞする。つゝめど色に

（『新百人一首』第五・第三卷二二四頁一〇行）

◆身はなら柴のしばしまも残りてうきめ見んよりは。たへなばたへね玉のをの。それもかなはぬ主めいに。我と心を取なをし。

（『忠臣青砥刀』中之卷・第七卷二三八頁六行）

九二 我袖はしほひに見えぬおきの石の

人こそしらねかはくまなし

◆我うは髭も引むしりやつこ姿をおきの石。人こそしらねおかしやと笑ひて。おくに入給ふ。（『殺生石』第一・第四卷一三五頁二行）

◆たとへていわふなら。塩干にみへぬ沖の石どふかかふかの氣遣に。思ふが余つてにくいやら袂のかわく隙もなし。

（『鎮西八郎唐土船』第一・第五卷一六五頁一三行）

九三 世中はつねにもがもななさ漕あまのをぶねの綱手かなしも

◆今ではかひもななさこぐ。あまの小船のがれ来てせめてさいこの御顔をおがまんと（『鎌倉三代記』第四・第四卷二二〇頁一三行）

九五 おほけなく浮世の民におほふ哉わがたつ袖にすみぞめの袖

◆ほつぐはんをこそこのべられけれ。おほけなく浮世の。民に覆ふかな。我立袖に。墨染の袖。しがくの春の始より。

（『愛護若婿箱』第四・第二卷一七三頁八行）

九七 こぬ人をまつほの浦の夕なぎに

やくやもしほの身もこがれつゝ

◆今かくとこぬ人を。まつおのうらの夕なぎにやくや藻汐の。身もこがれつゝ心やさしくたけ高く。

（『新百人一首』第五・第三卷二二四頁一一行）

九八 風そよぐならの小川の夕暮は御祓ぞ夏のしるしなりける

◆風そよぐ。ならの小川にせしみそぎ。それはみな月なごしの祓是は。真言秘密の法（『花山院都異』第一・第三卷二三〇頁五行）

九九 人もおし人も恨めしあぢきなくよをおもふゆへに物思ふ身は
◆いさめに死するは女として夫にはおとるまい世を思ふゆへ物思ふ。

身のおろかさぞ恥かしやと。

（『甲陽軍鑑今様姿』第四・第三卷五三頁六行）

注1 『伊勢物語』の和歌については、便宜的に「日本古典文学大系」本を基にした。

注2 『百人一首』については、便宜的に「角川日本古典文庫」本を基にした。

（付記）海音の古典和歌利用の方法については、後日の課題とする。

（とみた やすゆき・北大助教授）